

特別講演

子どもの心を満たす“声の力・言葉の力”

— 音読ではなく朗読の深みへ —

山根基世 (元 NHK アナウンス室長・アナウンサー)

私は、「朗読」を手がかりに、地域の人々をつなぎ、皆で「子どもの言葉を育てる」仕組みを作ろうと活動している。

「朗読」には、人々をつないだり、子どもの心身を育てたりする力があると思う。

日本語が読める人なら誰でも朗読はできる。しかし、ただ書かれた文字を音声化するだけの朗読は「音読」。それは「朗読」ではないと、私は考える。

「朗読」とは、黙読百回、作者の意図を十全に読み取り、自分の身体の中に入れ、それを聞く人の「耳」にではなく、「心」に届けること。

誰でも始めることはできるが、極めようとする、どこまでもたどり着けない奥の深さがある。だからこそ、朗読を共に学ぼうという人々をつないでいく力にもなる。

子どもの言葉を育てるための「読み聞かせ」や「朗読」では、うまく読む必要はない。

しかし、外してはならない基本がある。

生き物としての正しい呼吸・発声と、日本語の正しいイントネーションだ。

内容を「伝える」ためには、意味内容と呼吸を合わせることが大切なのだ。

「声」を出すことは、全身運動であり、「朗読」は肉体作業でもある。

朗読の基本を子どもたちに伝えることは、子どもの言葉を育てるだけでなく、呼吸法・発声法など身体のトレーニングにもなる。

正しい呼吸の、思いのこもった肉声は、聴覚を通して大脳辺縁系に届き、人の心を動かすという。椋鳩十は「お母さんの声は金の鈴」と言っている。太宰治は幼い日、叔母の胸で、毎晩津軽弁で語られる昔話を聞いた。

身近な人の温かい肉声は、子どもの言葉を育てる力が大きいのである。



〈プロフィール〉

Motoyo YAMANE

1948年山口県生まれ。早稲田大学卒業後、NHKに入局。多数の番組、ニュース、ナレーションを担当。2005年、女性として初のアナウンス室長。2007年、NHK退職後、「子どものことば」を育てることを目的に、LLP「ことばの杜」を設立。放送経験を生かして朗読、読み語り等、様々な活動を行った。2013年からは、地域作りと言葉教育を組み合わせた独自の活動を続けている。2000年・放送文化基金賞、2008年・前島賞（通信協会）、2009年・徳川夢声市民賞受賞。NHK退職後はテレビ朝日「徹子の部屋」、日本テレビ「世界一受けたい授業」出演をはじめTBS「半沢直樹」ナレーションなど、民放の番組も担当。2017年度より学校法人 順心広尾学園 理事。著書『ちっちゃな木のおはなし』やまねもとよ訳／ローレンロング 出版社：評論社（2017／4）他、多数。

